



筑波大学体育専門学群主催

令和2年度

体育科学シンポジウム

## 公式ガイドブック

本シンポジウムは体育専門学群1年生の必修科目となりますが、どなたでもご参加いただけます。

2020年、新型コロナウイルス・パンデミックにより、私たちを取り巻く環境は突如として一変、生活様式の変容が求められている。その裏側で、今後来る東京オリンピックは、体育・スポーツの注目度を最高潮に高めるとともに、その価値を見直すきっかけを与えてくれている。これらを契機とし、学校教育改革、競技スポーツの快挙、最新スポーツ科学の動向に着目して「2020年」を振り返ることで、私たちは今後の体育・スポーツの在り方を探れるかもしれない。

本シンポジウムでは、「研究」「競技」「教育」の3つの観点から、私たちが担うべき体育・スポーツのこれからの「カタチ」を捉え直してみたい。

### 企画・運営：筑波大学大学院博士後期課程体育科学学位プログラム

伊藤まこと（体育・スポーツ経営学研究室）

小川慶図（体力学研究室）

桑水隆多（運動生化学・スポーツ神経科学研究室）

陳 奕璋（スポーツ政策研究室）

平賀大一（運動生化学・スポーツ神経科学研究室）

房 慧（運動生化学研究室）

堀川 峻（武道学研究室）

宮地 美帆（健康教育学研究室）

## 令和2年度体育科学シンポジウム1

### 研究編: 体育・スポーツ研究のカタチ～将来のスポーツ科学を見据えて～

#### 開催概要

期 日：2021年1月27日（水） 12:15～15:00

会 場：オンライン開催

座 長：桑水 隆多・房 慧（筑波大学体育系）

シンポジスト：

諏訪部 和也先生 流通経済大学スポーツ健康科学部

Rakwal Randeep 先生 筑波大学体育系

野坂 和則 先生 Edith Cowan University (オーストラリア)

#### 開催趣旨

研究とは、過去の知見を踏まえて新しい発見を通して未来の価値を生み出し、時に常識を覆し、標準化していく仕事である。これは、体育・スポーツ科学研究も変わらない。では、スポーツ科学研究者は普段どのようなことを考えながら、どのような未来を創造することを目指して仕事しているのだろうか。

本シンポジウムでは、特色ある経歴を持つスポーツ科学研究者を国内外からお招きした。この2020年を節目として体育・スポーツ科学の実際と将来のあり方についてご自身の経験と知見を基に議論していただき、将来を見据えて「体育・スポーツ研究のカタチ」を探索する。この議論は、将来、研究者を目指す学群生は勿論、スポーツに関わる全ての人にとって有益となるに違いない。

## 令和2年度体育科学シンポジウム2

### 教育編:新しい体育のカたち～変わりゆく「学校」の中で～

#### 開催概要

期 日：2020年2月3日（水） 12:15～15:00

会 場：オンライン開催

座 長：伊藤まこと・堀川峻（筑波大学体育系）

シンポジスト：

三田部勇先生 筑波大学体育系

長谷川悦示先生 筑波大学体育系

（映像資料出演）

川崎臣先生 茗溪学園中学校高等学校教諭

堀川勝史先生 東京都庁教育庁指導部体育健康教育担当課長

土方伸子先生 お茶の水女子大学附属高等学校教諭

佐藤健太先生 お茶の水女子大学附属高等学校教諭

#### 開催趣旨

2020年、新型コロナウイルスの未曾有のパンデミックによって、政府は学校機関に対し3月から6月にかけて臨時休校を要請した。これによりオンライン授業、時間差登校、臨時課題作成や成績の取り扱いと学校現場が多くの対応に追われたことはまだ記憶に新しい。現にこのシンポジウムも感染症予防対策の観点からオンラインでの開催が決定した。多くの学校現場で「新たな生活様式」に準じた授業のあり方が模索される一方で、2020年は新学習指導要領への移行が小学校から順次始まり、大学入試センター試験が廃止され「大学入学共通テスト(通称・新テスト)」が初めて実施されるとして、教育のあり方が大きく転換する一年でもあった。

「社会に出てからも学校で学んだことが生かされるような」「主体的・対話的で深い学び」という文部科学省が掲げた「新しい学力観」は、体育という分野でどのように扱われるべきなのだろうか。そしてこれから体育教員に求められる資質・能力はどう変わっていくのだろうか。体育科教育研究と学校体育現場、双方の幅広い視点から探っていく。

## 令和2年度体育科学シンポジウム3

### 競技編:新しい大学スポーツのカタチ～箱根駅伝復活を遂げて～

#### 開催概要

期 日：2021年2月10日（水） 12:15～15:00

会 場：オンライン開催

座 長：平賀大一（筑波大学大学院）

シンポジスト：

弘山 勉 氏 筑波大学陸上競技部コーチ・男子駅伝監督/TSA 准教授

大土手 嵩 氏 筑波大学陸上競技部駅伝主将/体育専門学群4年

加藤 有美 氏 株式会社アーチ/運動栄養学研究室 (当時)

越智 元太 氏 ヒューマン・ハイ・パフォーマンス先端研究センター  
(ARIHHP) 研究員

#### 開催趣旨

年々注目度が増す正月の風物詩・箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競走）。東京大手町と箱根芦ノ湖の往復約200kmを各大学10名で襷を繋ぎ、競う。近年、各大学がさまざまな戦略を展開し、ハイレベルな争いが繰り広げられている。例年、出場校は財力に勝る私立大学が占める中、国立大学・筑波大学は、その前身である東京高等師範が初代優勝を飾りながらも、近年は長い低迷期にあった。そんな中、筑波大学箱根駅伝復活プロジェクトが発足。弘山勉監督のもとに再始動したチームは、筑波大学ならではの新たな戦略のもとに、実に26年の時を経て予選会を勝ち抜き、箱根駅伝本戦復活の快挙を成し遂げた。そして2020年1月、筑波大学は再び箱根路へ飛び出すと共に新しい挑戦が始まった。

本シンポジウムでは、筑波大学が箱根駅伝復活を成し遂げた要因をめぐり、今後のチームの課題やあるべき姿を探索する中で、大学スポーツ・学生競技者のあるべき「カタチ」について考える。